

現況分析における顕著な変化についての説明書(研究)

法人名 京都大学

学部・研究科等名 生命科学研究科

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例2 「科学コミュニケーション」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

最新の生命科学の成果を市民に紹介することは本研究科における重要な課題である。文部科学省の科学技術理解増進施策の一環として平成18年度に作成し、配布された「一家に1枚ヒトゲノムマップ」は、平成20年度に高等学校の副読本に掲載された。また英語版を平成20年10月25日に発行、解説書籍「ヒトゲノムマップ」(京都大学学術出版会)を平成20年6月に出版した。この書籍は現在までに3,300部が販売されている。

また、植物生理学会が主催するサイエンスカフェにおいて、講演「芦生の森～原生林に隠された秘密を探る～」 「植物はどうして日焼けをしないの?～光合成の酸素ストレス対策～」(平成20年度2回開催、参加者計約60名)を企画するとともに、「生物時計」をテーマとした生命科学の最先端の研究成果を、オリジナルのCGや楽曲とともにまとめた映像コンテンツをDVD「宇宙と細胞に物語をみつけました!」としてまとめ、平成20年12月に京都大学から発売、さらには、平成21年3月に京都大学iPS細胞研究センターが幹細胞研究を一般の人々に紹介するために発行した「幹細胞ハンドブック」(平成21年度2,000部、平成22年度1,000部増刷)の企画・制作に大きく貢献するなど、科学コミュニケーションの実践研究を、より活発に展開している。

また、文部科学省科学研究費特定領域ゲノム4領域が開催するゲノム研究者と市民との交流事業「ゲノムひろば」を、生命文化学分野が企画・運営するとともに、生命科学研究科の多数の教員・大学院生が出展あるいは解説員として参加し、科学コミュニケーションを実践している。本活動は、平成14年度から開始されたものであるが、平成21年度までの累計で計13回開催、参加研究者延べ約2,300名、一般来場者数延べ約15,700名、生命科学研究科参加教員・学生数 各回約10-20名という極めて大規模な活動の実践となっている。ゲノム研究者がこの規模で街に出て、市民と対話した企画は日本で初めてである(平成20年度:1回開催、一般来場者延べ約1,017名、平成21年度:1回開催、一般来場者延べ約1,711名)。

平成18年度から21年度までの生命文化学による多岐にわたる活動は、京都新聞『生命科学は今社会へつなぐ』(平成19年8月16日)、産経新聞(大阪版)『「ゲノムって?」に分かりやすく』(平成19年9月17日)、読売新聞・夕刊『師あり弟あり 科学を伝える』(平成19年11月20日)、読売新聞『万能細胞iPSの奇跡3』(平成20年2月17日)などにおいて紹介されている。

また、掲載年度は平成22年度になるが、生命文化学分野担当教員が参画している国際がんゲノムコンソーシアムの活動ならびに研究成果が英国科学誌「Nature」に掲載されている。

以上のように、生命科学研究科生命文化学分野は、日本における科学コミュニケーションの実践研究の重要拠点の一つとして、この研究分野の推進に大きく貢献し続けており、科学コミュニケーション研究の質を、大きく改善、向上していると判断される。